

## 教育の国際化による道徳性研究の課題

企画・司会 内藤俊史（お茶の水女子大学）  
 話題提供者 田沼茂紀（川崎市立河原町小学校）  
 栗加 均（流山市立南流山中学校）  
 荒木紀幸（兵庫教育大学）  
 指定討論者 大西文行（横浜市立大学）

### 主旨

道徳教育においても国際化への対応が叫ばれて久しい。しかし、この点についての教育心理学における研究は必ずしも多いとはいえない。したがって、本シンポジウムでは、今後の研究のための提案、示唆を得ることを第1の目的とする。以下の問が本シンポジウムの基底にある一般的問である：「国際化」によって道徳性の教育心理学研究に課せられる新たな点はあるのか、もしあるとすればそれは何か、それに取り組む際の困難は何か。ここでは、主に小中学校における道徳授業に焦点を当て、道徳授業に関する研究を積極的に行っている3名の話者提供者によるそれぞれの研究成果をふまえた提案がなされる。

### 道徳授業におけるself-esteem促進プログラムの試み

田沼茂紀（神奈川県川崎市立河原町小学校）

昭和33年に道徳の時間が特設されてから、38年が経ようとしている。しかし、高度情報化社会の到来とともに国際化が急激に進展しつつある今日においても、道徳の時間はそれに主体的かつ創造的に対応する能力・資質としての道徳性を育成する場として十分に機能しているとはいいがたい現状にある。各学校における授業そのものの実施状況はさておき、学習という視点から問い直すなら、やはりそこには道徳的価値そのものを学習させることに主眼をおいた授業構想に問題点が潜んでいるのではないだろうか。

道徳授業の目的は、学習指導要領にも示されている通り、各教科及び特別活動における道徳教育つまり子供の道徳性形成にかかわる学校生活全般を視座しながら計画的・発展的に補充・深化・統合し、「生きる力」としての道徳的実践力を育成していくことにある。また、その形成主体は他ならぬ子供自身である。ならば、道徳授業でまず第

一義に考えなければならないのは、子供自身が自らを価値ある存在として肯定的に評価し、現在から将来にわたってよりよく生きていくための理想的自己への変容を志向する意志力形成の場として機能させていくことであろう。いわば、予め設定した道徳的価値追求を目標に授業構想するといった従来の発想から、子供自身が知覚された自己と理想的自己の接点を見いだす過程でそれらにかかわる道徳的価値を複合的に自覚化していけるような道徳授業へと発想の転換を図っていくことが大切であると考えられる。

具体的には、子供自身が他とのかわりを持ちながら得た客観的情報を基に自己評価し、自らの価値観を軌道修正する過程で自分のものの見方・感じ方・考え方のよさ、学び方のよさを肯定的にイメージしていけるような表現活動の場を組み合わせるという方法論的手法で授業構想していく。ただ、表現活動を中心に授業展開するといっても、導入、展開、終末とその段階における表現目的、学習目的はおのずと異なってくる。それらを踏まえた表現活動構想に基づいて展開する道徳授業プログラムを一定回数にわたって意図的に実施することで、新たな方法論的発想にたつ道徳授業の可能性を探ろうとするのが本研究の目的である。

### 道徳の授業をととしての国際理解教育

栗加 均（流山市立南流山中学校）

今日の通信、交通などの技術の飛躍的発展は、多様なコミュニケーション伝達の手段を生みだし情報、人、ものなどの国をこえた交流を盛んにしている。このことは、ますます世界の国や人々の相互依存性が高まり、地球的規模で、人類全体のことをとらえなければならない状況が生じていることにほかならない。つまり、これからの社会は否応なく「国際化」されるということである。

こうした時代に主体的に生きていくためには、

自他の違いを認識しつつ、相手を尊重し、互いに助けあい、力をあわせてよりよい世界を築いていくとする「文化相対主義による多文化共存の国際化」にたった、国際理解の精神・国際協力が大切となることはいうまでもない。

国際化の時代にあって、これからの学校教育の果たす役割は大きい。日本人に求められている「国際的資質」を明らかにし、「国際理解教育」を積極的に行っていく必要があるし、強く求められてもいる。この国際理解教育の内容として含まれるものは、幅広く、普遍的なものとして、人権の尊重、日本や外国の文化伝統の理解、人間としての同一性の問題、相互依存性や自然環境の問題などの世界現実理解などをあげることができる。

現在、特に中学校に限れば、国際理解教育を推進していく時間は、「道徳の授業」が重要視されているが、現場には浸透していないというのが実情である。今後、ますます道徳の授業で国際理解教育の推進が求められてくるにちがいない。

そこで、中学校の子どもたちに求められている国際的資質を「日本人としてのアイデンティティ」「コミュニケーション能力」「相互理解」の3点にしぼり、道徳資料のなかでの取扱い、道徳の授業のなかでのとり上げかた、子どもたちの変容、から明確にすることが重要である。

つまり、道徳の授業における

(1) 道徳副読本のなかに含まれている日本人の国際的資質の記述内容を分析する。

(2) 日本人としての国際的資質の育成をめざした子どものための指導過程を定立する。

(3) 国際的資質にかかる子どもたちの変容をとらえる方法を工夫し、考察する。

ことをとおして、国際理解教育を具体化し、実践していくことが考えられる。ここでは、「道徳の授業」での、国際理解教育をとおして道徳性の育成の実証的方法および考察を提示したい。

#### 認知発達論に基づく異文化間教育モデル

荒木紀幸（兵庫教育大学）

われわれは小学生の異文化に対する態度について因子分析した結果、①外国人に対するあこがれ、②外国人に対する主体的関与、③外国人に対する漠然とした不安、④外国人に対する違和感の4つの因子を抽出した（1994）。この4つの因子が国際理解教育の文部省指定校（90校、1990～92）の

研究主題、研究計画の中でどのような扱いであるかを、価値の伝達多次元モデル（Belanger, W. A., 1993）に基づいて分析した。この結果、第③・④因子の区別が不明瞭な上、潜在的な扱いで偶発的な効果を期待しているに過ぎないことが分かった。

こうした国際理解教育の問題点を補完するために、役割取得能力の発達を中核とする「異文化間教育」の仮想モデルを提案した。その要件として、

- 1) 役割取得能力の発達を援助する道徳授業
- 2) 異文化に対するポジティブな態度を形成するための指導
- 3) 異文化に対するネガティブな態度を低減するための指導
- 4) コミュニケーション能力の向上
- 5) 道徳的雰囲気構築
- 6) 役割取得能力の発達を基礎とする知識形成

これらの要件は異文化間教育において、対話と社会的認知の発達を重視する立場（Boyd, D. 1992）に基づいている。

道徳授業—コールバーグの道徳性の認知発達理論を取り入れたモラルジレンマによる授業で、「道徳的認知葛藤の経験」と「役割取得の機会」を取り入れた討論授業を介したオープンエンドの道徳的問題解決学習を特徴とする。

不安低減のための認知論的アプローチ—アメリカで開発された異文化トレーニングの1手法であるカルチャー・アシミレーターを導入。これはトレーニングを受けるものに他の文化に内在する基本的な考え方や態度、役割期待などを提示し、文化によって規定された視点に気づかせ、相手の視点から理由づけができるようにするものである。

道徳の時間（国際理解と親善）の実践例（小学5・6年）：共同研究の森川（愛知県米田小）は異文化問題を扱った自作のモラルジレンマ資料「かさをもたずに（1994）」、「愛犬と暮らす—どちらが正しいか（1995）」の実践を行い、役割取得能力への影響や不安低減の可能性を検討している。